



第百三十六號

(第十二卷)

昭和七年八月

二つの重要事

(巻頭言)

愈々1932年の八月である！

此の八月1日から來年七月31日まで滿一ケ年間、「國際極地觀測」が實行される。主として地球物理學的な諸方面に於いて、氣象、地磁氣、空中及び地中電氣現象、電波學等の協同研究であるが、此等の現象は皆わが太陽の黒點活動と密接な關係があるのであるから、純天文學の方面としても、第一に太陽の特別な研究觀測が行はれ、同時に、黃道光や一般の流星現象など、直接間接に地球大氣と關係するものゝ熱心な研究が行はなければならない。

今一つ此の八月に見逃がすべからざるものは、三十一日に米國に於いて起る皆既日食である。世界全般にわたつて財政的に非常に窮迫してゐる際であるから、他の國々からの觀測者たちが出漕のみならず、米國やカナダ領内の觀測隊ですらプログラムの種々の點について制限を加へられ、困難を嘗めてゐる時期である。學界のため、非常に遺憾な點が多いけれど、止むを得ない。——しかるに、此の際に當り、我が東京の三鷹天文臺から乃川野附の兩理學士が彼地に派遣されることとなり、去七月初めオリムピック競技に参加する選手たちと同船して出發された事は、甚だ愉快なるニュースと言はねばならない。兩氏の成功を心から祈る次第である。我等の京都帝大でも此の日食の觀測遠征計畫をたて、多少の準備を運んだのであつたが、結局、充分な資金が得られず、最近に至つて遂に斷念した次第である。

上記の二事件は、吾々天文關係者として、大に其の事業の成功を祈り、今1932年度をして永久に記念せしむべきものとしたいものである。(終)